

# 経営に見合った愛車探しを!

あの機械  
この技術

# 私の取扱説明書 12



佐賀県武雄市

## 吉永悟氏 (50)

経営面積：水稲15ha(夢しずく、ヒノヒカリ、山田錦、ヒヨクモチ)、イタリアングラス(裏作の緑肥として)  
労働構成：本人とアルバイト1名

**1** MF292 ブラジルで組み立てた105馬力のいわゆる従業員が作業に使うためのトラクター(2005年製)。快適性を担保するキャビンも、電子制御機構も搭載されていない。PCを搭載したトラクターは作業中に故障するとメーカーの営業マンが交換部品を持ってくるまで作業が止まり、部品代も馬鹿にならない。そこで、なるべく外からの影響を受けず、テスターの要らない、壊れない機械を探したという。昨年の稼働時間はわずか50時間だが、スタブルカルチなど牽引式作業機の作業に大活躍だ。直進性に優れる代わりに、急には止まれないというが、特徴をつかんで操作すれば、長所にもなる。自ら修理すれば、修繕費の節約ができるというのが最大の導入理由だ。



1



2

**2** 武雄市のなかでも北側に位置する武内町は水稲単作経営の多い中山間地域で、標高は60mだが唐津方面に流れ出る松浦川の源流域にあたる。かつては裏作で麦を栽培してきたが、天候不順が続き、収量も圃場にすぎ込む麦ワラも減少し、採算が合わなくなったという。武雄市で10ha以上の規模で転作をしていないのは吉永氏のみ。直販で利益を確実に上げる方法を選んでいる。一方で中山間ならではの悩みは獣害である。力を入れてイノシシ対策をしたが、数は減ったが根絶は難しいという。

佐賀県武雄市の中山間地で稲作を営む吉永悟氏が2年前に導入したのは、ブラジル製の電子制御の少ない簡素なトラクターだ。15ha規模の経営で、なおかつ4年前に麦の転作をやめてからはトラクターの稼働時間がさらに減ったことから、修理費がかからないトラクターを探し、この一台に出会ったそうだ。

機械費を安く済ませる方法は2つある。最新鋭の作業効率の上がる機械を導入して、稼働時間を増やす方法と、必要な機能だけを搭載した安価な機械を手に入れて、最低限の稼働時間で長く使う方法だ。吉永氏の規模のコメ単作経営であれば、後者を選ぶほうが有効かもしれない。

吉永氏は高校を卒業後、鹿児島県の牧場での1年間の研修を経て、19歳で実家の農業に就いた。当時は父が肉牛繁殖に力を入れていたが、土地が集まってきたことから耕種に転換。それを機に、畜産部門を引き継ぎ、和牛肥育を担当した。しかし、事業の規模拡大を図って餌の商売に挑戦するも失敗。耕種に専念したの



5 補助事業で導入したスター農機のマニアスプレッダ（容量：3t）。クローラーを後付けした。 6 7 土壌改良剤として、毎年投入しているミネカルを散布するためのスパウト式のブロードキャスター（容量300kg）と26馬力のキャビンなしトラクター。ミネカルは製鉄クズなので、機械を摩耗させるのが難点だ。50t程度散布すると穴が開くので、スパウト部分を樹脂製からステンレス製に交換した。



3 クボタ G L 265は3年間で140時間の稼働。シュレッダーなどの作業機と相性がいい。 4 FORD6610は1989年製の79馬力のトラクター。10年前に導入し、マニアスプレッダーの作業等に使っている。



10 種子選別用に使っているサタケの横型選別機。選択した理由は①シンプルで壊れない、②落とす米粒が多くても問題がないという2点。夢はずくは大粒品種なので、2.4mmで、ほかの品種は2.3mmで2～3回選別機にかける。



9 乾燥機は3基で合わせて110石。牛の敷きワラ用の小屋を改造して使っているため、床に傾斜があり、乾燥機を据え付ける際に高さの違うブロックを置いて、対応したという。



8 昨年、4条刈り自脱型コンバイン（クボタWR460）を導入した。これまでの愛車、SKYROAD-PRO 401は1,598時間の稼働で部品交換も増えてきたが、新しい機械と併用していく。

【吉永氏の作業暦】

11月	10月	9月	8月	7月	6月	5月	4月	3月	2月	1月	12月	11月	10月	9月
水稲(4品種)						緑肥(イタリアグラス)								
・水稲収穫 ↓ 緑肥播種		・防除(適宜)追肥 (ゆめしずく除く)			・定植+元肥散布	・代かき	・転炉スラグ散布	・切断+すき込み	・施肥②(硫安)	・施肥①(硫安)	・水稲収穫 ↓ 緑肥播種			

は、30代半ばのことだ。「適地適作で経営のかたちも変わってくるだろうな」

全国各地から入ってくる情報を精査して、補助金ベースでは経営を維持できないと感じるようになったという。コメの農協集荷をやめ、採算の合わない大豆や麦の転作をやめた。忙しなくなるだけで労賃の捻出にも苦労するからだ。大規模経営では汎用性を求めるが、この規模では汎用性を求め、この規模では畑作用の機械や装備を持っていれば、畑作と水田をやり続けなければいけなくなる。

佐賀県の平均的な稲作経営は、1・5m幅のロータリーと4条刈りコンバインの装備で麦とコメを作付けすると、12haが限界という。では、15haの水稲単作で食べていけるのか。「10a当たりの売り上げが10万円弱と厳しいが、稲作にも麦にかかる余計なコストもない。トラクターの稼働時間が相当少ないし、燃料消費量もだいぶ違う。秋は起こさず、コメを収穫したその日のうちに、緑肥を播種して、サブソイラーは時間のあるときに引けばいいからね」

今後、30haまでの規模拡大を見据えて、コンバインを増やし、乾燥調製設備も整えている。さらに、集落の便利屋さんも担当している。規模拡大を図れないエリアならではの営み方があるようだ。(加藤祐子)